雌豚の奉仕亭
汚臭美少女はじめました！
（処女膜無限破瓜プレイ付き）

雌豚の奉仕亭・・・

俺が経営する店の名前だ。
店舗ごと世界各地を巡り、その先々で手に入れた地酒や食材などを使って作った料理が人気の酒場だ。

色々と訳があり基本的に従業員は俺一人。
だがさすがに調理から接客、その他諸々すべてを一人でこなすのには無理がある。
そこでいつもは開店する先々で臨時の従業員を雇っているのだが
これもまた訳ありで条件に合う良い人材が見つからないコトも多い

今回も開店先を決めたはいいが、なかなか条件に合う従業員が見つからないでいた。
どうしたものかと悩みながら開店準備を進めていると・・・

「入ってきていきなり倒れるから驚いたじぇ…」

開店準備中だった店の扉を勢いよく開け放ち入ってきたのは
頭から足の先まで全身を鎧で覆った大男…
店内を一通り見回した後、ヨロヨロと歩き出したかと思えば
いきなり倒れてそのまま動かなくなった。
何事かと驚いたが、驚きはそれだけではなかった。
当然そのまま放置しておく訳にもいかないので
とりあえず息の確認をしようと鎧を脱がしてみたのだが・・・
中から出てきたのはなんと・・・美少女だった。

「とりあえず運んではきたが・・・どうするか・・・」
鎧をすべて脱がした後、寝室のベッドに寝かし
今後の対応を考えていた。
このクソ暑い中あんな鎧を着て歩き回っていたからか
「全身汗で蒸れてホカホカじゃないか・・・熱中症か？」
少女の全身からは汗が噴き出していた。
それと共に立ち込める蒸れた汗の臭いと濃い雌臭。
俺の身体の中心でドス黒い欲望のドラゴンが
ピクリとその首をもたげるのが分かった。
はぁ はぁ
ムンムン

「にしてもこの娘いい身体してやがんな…
従業員として雇えればいいんだが…」
横たわる少女の全身を舐めるように見回しながらそう考える。
意識が戻ってからじゃ面倒だな…
今のうちに採用試験だけでも済ませておくか。
折角の採用試験だ、名無しのままでは味気ない。
エリザベス（仮）と名前を憑けておくコトにする。
それではエリザベスさん…
雌豚の奉仕亭　従業員先行採用試験を始めます。

「一応、怪我をしていないか確認しておくか。
あくまで怪我がないかの確認だ。」
意識は戻ってないか？ となんとなくそんな言葉を発しながら
エリザベスの腕を持ち上げた。
特に反応はない。 やはり完全に意識を失っているようだ。
これなら暫くは目を覚まさないだろう・・・ まあ多分
「それにしても・・・」

「一応、怪我をしていないか確認しておくか。
あくまで怪我がないかの確認だ。」
意識は戻ってないか？ となんとなくそんな言葉を発しながら
エリザベスの腕を持ち上げた。
特に反応はない。 やはり完全に意識を失っているようだ。
これなら暫くは目を覚まさないだろう・・・ まあ多分
「それにしても・・・」

「腋も汗で蒸れてホカホカだな。
しかもたっぷりごま塩付きじゃねぇかw　それに…」
このツンと鼻に刺さる酸っぱい刺激臭…
どうやらこの数日間は水浴びすらしていないようだ。
スーーーハァーーーー…スーーーハァーーーー…
「はぁ…くっせー…スゴイ臭いだ…」
鼻から入った臭気がそのまま脳天を突き破るかと思うような汚臭。
しかしこれ程の汚臭でも、こんな美少女のモノだと思えば
逆に興奮材料になってしまうから不思議なものだ。

むふあっ

「腋も汗で蒸れてホカホカだな。
しかもたっぷりごま塩付きじゃねぇかw　それに…」
このツンと鼻に刺さる酸っぱい刺激臭…
どうやらこの数日間は水浴びすらしていないようだ。
スーーーハァーーーー…スーーーハァーーーー…
「はぁ…くっせー…スゴイ臭いだ…」
鼻から入った臭気がそのまま脳天を突き破るかと思うような汚臭。
しかしこれ程の汚臭でも、こんな美少女のモノだと思えば
逆に興奮材料になってしまうから不思議なものだ。

むふあっ

いつの間にか俺の股間もこの雌の匂いに反応し
はちきれそうなほどに勃起していた。
気を失って倒れている少女の腋の匂いを嗅いで
股間を膨らませるなど何と卑劣な行為…
はぁはぁ
などという感情も逆に興奮を掻き立てる。
そんな理性的な思考の猶予すらも与えられないほど
この少女が放つ芳香は強烈で強制的に俺の欲望を加速させた。
ムンムン

いつの間にか俺の股間もこの雌の匂いに反応し
はちきれそうなほどに勃起していた。
気を失って倒れている少女の腋の匂いを嗅いで
股間を膨らませるなど何と卑劣な行為…
はぁはぁ
などという感情も逆に興奮を掻き立てる。
そんな理性的な思考の猶予すらも与えられないほど
この少女が放つ芳香は強烈で強制的に俺の欲望を加速させた。
ムンムン

そのまま腋臭を嗅ぎつつ指で腋を弄ってやると
腋汗がジワジワと染み出てくる。
テラテラと光るその腋汗のエロさに、
とうとう辛抱たまらずむしゃぶり付いた。
ビクッ
ふうん
トロトロ
「うんめぇ…
しばらく風呂にも入ってねぇ美少女の汚腋はたまんねぇな！」
腋汗のしょっぱさと汚れのすっぱさが、生えかけの腋毛と共にチリチリと
俺の舌を刺激してくる

そのまま腋臭を嗅ぎつつ指で腋を弄ってやると
腋汗がジワジワと染み出てくる。
テラテラと光るその腋汗のエロさに、
とうとう辛抱たまらずむしゃぶり付いた。
ビクッ
ふうん
トロトロ
「うんめぇ…
しばらく風呂にも入ってねぇ美少女の汚腋はたまんねぇな！」
腋汗のしょっぱさと汚れのすっぱさが、生えかけの腋毛と共にチリチリと
俺の舌を刺激してくる

「あぁ　溢れてくる　どんどん溢れてくるぞぉ！
もっとだ、もっとお前の腋汗を飲ませてくれっ！」
俺は夢中で少女の腋に吸い付き、溢れ出る腋汗を飲み下す
はっ はっ
はぅ あ
プルプル
ドロドロ
チュパ
チュパ
それに反応して俺の下半身は今にも破裂しそうで
痛みを伴うほどに怒張していた。
俺はたまらずズボンの下で締め付けられ
苦しそうにしていた股間を開放し刺激を与え始める。

「あぁ　溢れてくる　どんどん溢れてくるぞぉ！
もっとだ、もっとお前の腋汗を飲ませてくれっ！」
俺は夢中で少女の腋に吸い付き、溢れ出る腋汗を飲み下す
それに反応して俺の下半身は今にも破裂しそうで
痛みを伴うほどに怒張していた。
俺はたまらずズボンの下で締め付けられ
苦しそうにしていた股間を開放し刺激を与え始める。
はっ
はっ
はぅ
あ
プルプル
ドロドロ
チュパ
チュパ

ビクビクビクっ！
「うっ！　なっ……に！　うおおおうっ！」
びゅっ
びゅるっ！　びゅるるるびゅるっ！
びゅぴゅっ！　ぴゅっ！
びゅっびゅっ
びゅるるるるうう

ビクビクビクっ！
「うっ！　なっ……に！　うおおおうっ！」
びゅっ
びゅるっ！　びゅるるるびゅるっ！
びゅぴゅっ！　ぴゅっ！
びゅっびゅっ
びゅるるるるぅぅ

「バカな・・・少し弄っただけだぞ・・・
まさかたった三擦り半で達してしまうとは・・・」
美少女の汚臭に興奮しすぎてしまったようだ・・・
何という破壊力
「まあ、出てしまったものは仕方ない・・・次に行くか」
と気を取り戻し次なる目標的を目指す
ん、
うう、
ドロ
ドロ
ゲロ

「バカな・・・少し弄っただけだぞ・・・
まさかたった三擦り半で達してしまうとは・・・」
美少女の汚臭に興奮しすぎてしまったようだ・・・
何という破壊力
「まあ、出てしまったものは仕方ない・・・次に行くか」
と気を取り戻し次なる目標的を目指す
ん、
うう、
ドロ
ドロ
ザロ

そう、俺がこの女を目にした時、真っ先に視線を奪われた部分。
「なんて凶悪なモンを装備してやがんだ・・・」
ほとんど裸同然のボディーライン。
確かに服は着ているがデザイン的なのはもちろん
汗で生地が身体に張り付いている為
脱がすまでもなくその持ち物がいかに凄まじいかが見て取れる
うぅん・・・
もいい
もいい

そう、俺がこの女を目にした時、真っ先に視線を奪われた部分。
「なんて凶悪なモンを装備してやがんだ・・・」
ほとんど裸同然のボディーライン。
確かに服は着ているがデザイン的なのはもちろん
汗で生地が身体に張り付いている為
脱がすまでもなくその持ち物がいかに凄まじいかが見て取れる
うぅん・・・
もぃぃ
もぃぃ

射精したばかりで萎えていたはずの一物が再び奮激し始める。
「おお…じっくり吟味してからと思ってたが
我慢できねぇ…さっそく使わせてもらうぜ！」
抑えられない。
服を脱がす手間も惜しいと少し破いた服の隙間から
この怒張を一気に突っ込み挟み込む。
んん
モキッ
ムキッ
ブルン
ブリン

射精したばかりで萎えていたはずの一物が再び奮激し始める。
「おお…じっくり吟味してからと思ってたが
我慢できねぇ…さっそく使わせてもらうぜ！」
抑えられない。
服を脱がす手間も惜しいと少し破いた服の隙間から
この怒張を一気に突っ込み挟み込む。
んんっ
モキッ
ムキッ
ブルン
ブリン

「おおすげぇ！　なんてハンパねぇ乳圧だっ！」
柔らかい乳肉が俺の怒張を優しく包み込むも、
その肉量でムチムチと圧迫してくる。
いきなり激しいピストンを始めたが
潤滑油がエリザベスの汗のみなので滑りがあまり良くなく
強めの刺激がイチモツを襲う。
（くうっ！　なんだ？　こんなに早くっ　また出ちまいそうだっ！）
ピストンを始めて早々に感じる射精感に戸惑いながらも
その快感が詰まった肉塊に向かって精を吐き出す為の摩擦を
止めることは出来ずに腰を振り続けた。
ふぅぅん…
はっ
うぅん
むちっ
むちっ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ

「おおすげぇ！　なんてハンパねぇ乳圧だっ！」
柔らかい乳肉が俺の怒張を優しく包み込むも、
その肉量でムチムチと圧迫してくる。
ふうぅん…
はっ
うぅん
むちっ
むちっ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
いきなり激しいピストンを始めたが
潤滑油がエリザベスの汗のみなので滑りがあまり良くなく
強めの刺激がイチモツを襲う。
（くうっ！　なんだ？　こんなに早くっ　また出ちまいそうだっ！）
ピストンを始めて早々に感じる射精感に戸惑いながらも
その快感が詰まった肉塊に向かって精を吐き出す為の摩擦を
止めることは出来ずに腰を振り続けた。

「で…でるっ！！　おおおうっ！！」
びゅるびゅるびゅるっ　どぴゅるるっ　びゅるどぴゅっ！！
「ハァハァ…どうなってんだ…こんなに早く…」
けっして早漏ではないはずなのに、
まともにピストンすら出来ずに射精してしまう
しかも射精後なのに萎えない。
それどころか肉との摩擦を求めてますます怒張が激しくなる
ぶしゅっ
ビクン
ビクン
ドビュッ
びゅるっ
ビュルッ

「で…でるっ！！　おおおうっ！！」
びゅるびゅるびゅるっ　どぴゅるるっ　びゅるどぴゅっ！！
「ハァハァ…どうなってんだ…こんなに早く…」
けっして早漏ではないはずなのに、
まともにピストンすら出来ずに射精してしまう
しかも射精後なのに萎えない。
それどころか肉との摩擦を求めてますます怒張が激しくなる
ぶるっ
「ん」
ぷしゅっ
ビクン
ビクン
びゅる
ドビュッ
ビュルッ

「あぁっ！！ ダメだっ！ 止まらねぇ！！ 止めらんねぇ！！」
休まずそのまま腰を動かし続ける。
先程とは違って自らが吐き出した汚汁のせいで
ずいぶんと滑りが良くなっている。
「おぉっ！！これぞまさに乳マ〇コ！！」
パチュン
ブチュ
ブチュ
パチュン

「あぁっ！！ ダメだっ！ 止まらねぇ！！ 止めらんねぇ！！」
休まずそのまま腰を動かし続ける。
先程とは違って自らが吐き出した汚汁のせいで
ずいぶんと滑りが良くなっている。
「おぉっ！！これぞまさに乳マ〇コ！！」
パチュン
ブチュ
ブチュ
パチュン

「でるっ！　またでるっ！！　でるうっ！」
びゅるびゅるっ　ぶびゅびゅどぴゅ　びゅっどぴゅっ！
「うぅおあぁぁぁぁぁっ！　抜かれるっ！
ザーメンと一緒にち○ぽまで芯から抜かれちまいそうだぁぁぁぁぁ！」
ぶぴゅあっ　ぴゅるどぴゅっ　どぴゅじゅるっ！
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビュッ
ビュッ
ビュ

「でるっ！　またでるっ！！　でるうっ！」
びゅるびゅるっ　ぶびゅびゅどぴゅ　びゅっどぴゅっ！
「うぅおあぁぁぁぁぁっ！　抜かれるっ！
ザーメンと一緒にち○ぽまで芯から抜かれちまいそうだぁぁぁぁっ！」
ぶぴゅあっ　ぴゅるどぴゅっ　どぴゅじゅるっ！
ビク
ビクン
ビュッ
ビュルル
ビュッ
ビュッ
ビュッ

「うおぁぁ！　射精が止まらない！
どんどん噴き出してくるっぁ！」
どぴゅびゅるびゅるっ　どぷぷっびゅるっ！
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！　ざーちんぼるけーのぉ！」
びゅるぴゅっぴゅっ　びゅるびゅるっ！
ぴゅっ　とぴゅっ　ビクビク
ビチビチ
ビュルィィ
ズピピッ
ドピュッ
ブッ
ブッ
ブ

「うおぁぁ！　射精が止まらない！
どんどん噴き出してくるっぁ！」
どぴゅびゅるびゅるっ　どぷぷっびゅるっ！
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！　ざーちんぼるけーのぉ！」
びゅるぴゅっぴゅっ　びゅるびゅるっ！
ぴゅっ　とぴゅっ　ビクビク
ビチビチ
ビュルィ
ズピピッ
ん、
うぅ…
ブッピュッ
ブッピュッ
ブッピュッ
ブッピュッ
ブッピュッ

「はぁはぁ…にしてもなんて射精力と回復力…
いったい俺の身体はどうなってしまったんだ？」
「これだけ出してるのに・・・
何度でもいきり立ってきやがる・・・・」
そう、この匂いだ…この女の雌臭…
ドクッ
ビクッ
ビクッ
はぁはぁ
はぁはぁ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

「はぁはぁ…にしてもなんて射精力と回復力…
いったい俺の身体はどうなってしまったんだ？」
「これだけ出してるのに・・・
何度でもいきり立ってきやがる・・・・」
そう、この匂いだ…この女の雌臭…
ドクッ
ビクッ
ビクッ
はぁはぁ
はぁはぁ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

この女の全身から匂い立つ臭っせー雌汚臭を嗅ぐ度に
俺のチ○ポに芯が入りやがる
「やべぇーなこの女は・・・」
元々高位の治癒能力でも持っているのだろう。
倒れて自我を失ったコトで能力が制御を失い
中途半端に覚醒しているらしい。
それがこの雌臭と共に外に漏れ出しているようだ・・・
しかもこの能力、都合の良いコトに生殖能力まで
強化回復してくれるらしい
「これは大いに使えるな・・・
まあ、そんなコトは後回しだ。
滅多にない機会だ、今はコレを存分に楽しむとしようか」
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
ムンムン
ムレムレ

「くっはぁ！　予想以上にキツイ臭いだな・・・
チ〇ポにビンビン響いてくるっ！」
はやり暫く洗っていない汚マ〇コの臭いは
布一枚程度じゃ防ぎきれないらしい
むーん
むん
むん
うっすらとシミも出来ているようで
汗やおしっこ、代謝物などが混ざり合って、
とんでもない激臭を放っている。
「スーハー・・・スーハー・・・あぁぁ
ああ臭いっ！　臭いぞっ！　すごいニオイだ！
鼻が爆発しそうだ！」

「くっはぁ！　予想以上にキツイ臭いだな・・・
チ〇ポにビンビン響いてくるっ！」
はやり暫く洗っていない汚マ〇コの臭いは
布一枚程度じゃ防ぎきれないらしい
むーん
むん
むん
うっすらとシミも出来ているようで
汗やおしっこ、代謝物などが混ざり合って、
とんでもない激臭を放っている。
「スーハー・・・スーハー・・・あぁぁ
ああ臭いっ！　臭いぞっ！　すごいニオイだ！
鼻が爆発しそうだ！」

股間を覆っている布を脇へよせ、お目当ての
僕らの宇宙船恥丘号と対面する。
どういう理由かは分からないが
普段から陰毛を全部そり落としていたらしい。
しかし腋と同じく、ここ数日、処理できなかった間に
少し生えてきているようだ。
クイッ
もっん
もっん
花弁は大きくはなく端整で何処か気品すら感じられるが
その一本のスジにしか見えない程
ピタリと閉じられているはずの陰裂の奥からは
途轍もない芳香が漏れ出している
「くっ…開く前でもこんなに…
コレを開いてしまったらいったいどんな…」

股間を覆っている布を脇へよせ、お目当ての
僕らの宇宙船恥丘号と対面する。
どういう理由かは分からないが
普段から陰毛を全部そり落としていたらしい。
しかし腋と同じく、ここ数日、処理できなかった間に
少し生えてきているようだ。
クイッ
もっん
もっん
花弁は大きくはなく端整で何処か気品すら感じられるが
その一本のスジにしか見えない程
ピタリと閉じられているはずの陰裂の奥からは
途轍もない芳香が漏れ出している
「くっ…開く前でもこんなに…
コレを開いてしまったらいったいどんな…」

くぱぁ！
開いた刹那、今までとは比べ物にならない程の
溜めに溜め込んだ汚雌臭が一気に拡がる。
それを呼吸と共に自身の体内に摂り込んだ瞬間
あまりの激臭に気が遠くなる。
何度も何度も深く吸い込み鼻腔から肺まで
エリザベスの汚臭で満たす。
「た・・・たまらん・・・ハァハァ・・・
しかし処女か・・・こりゃ意識が戻っても
交渉の余地はなさそうだな」
むわぁぁぁぁ
くぱぁ
もわわぁ
本来の目的が頭を過るが目の前の光景に本能は抗えない。
これだけの汚臭を放つ状態なのだ。
当然ながら美少女には似つかわしくないあの物体も
順調に大量生産されていた。
クリトリスを被う包皮の内側から尿道口
膣穴の周囲から処女膜にまで、びっしりとこびり付くマンカス
「いただきますっ！」

くぱぁ！
開いた刹那、今までとは比べ物にならない程の
溜めに溜め込んだ汚雌臭が一気に拡がる。
それを呼吸と共に自身の体内に摂り込んだ瞬間
あまりの激臭に気が遠くなる。
何度も何度も深く吸い込み鼻腔から肺まで
エリザベスの汚臭で満たす。
「た・・・たまらん・・・ハァハァ・・・
しかし処女か・・・こりゃ意識が戻っても
交渉の余地はなさそうだな」
もわぁぁぁぁ
くぱぁ
もわわぁ
本来の目的が頭を過るが目の前の光景に本能は抗えない。
これだけの汚臭を放つ状態なのだ。
当然ながら美少女には似つかわしくないあの物体も
順調に大量生産されていた。
クリトリスを被う包皮の内側から尿道口
膣穴の周囲から処女膜にまで、びっしりとこびり付くマンカス
「いただきますっ！」

凄まじい汚臭を放つ美少女の匂い袋にむしゃぶりつくと
ここ数日エリザベスが大事に育ててきたマンカスを
歯と舌で丁寧に刮ぎ落す。
それをネチヌチと歯先舌先で咀嚼し
エリザベスの汚味を十分に味わった後、胃袋に送り込む
エリザベスの若くて激しい新陳代謝を利用して作る、
この世で唯一エリザベスだけが生産できる、
まさにエリザベスそのものだと言っても
過言ではない至高の食べ物！
そう！　それがこの・・・
「MADE IN エリザベスのマンカスっ！」
「うまっ！　うまっ！　くさっ！　うまっ！」
ぐちゅっ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ

凄まじい汚臭を放つ美少女の匂い袋にむしゃぶりつくと
ここ数日エリザベスが大事に育ててきたマンカスを
歯と舌で丁寧に刮ぎ落す。
それをネチヌチと歯先舌先で咀嚼し
エリザベスの汚味を十分に味わった後、胃袋に送り込む
エリザベスの若くて激しい新陳代謝を利用して作る、
この世で唯一エリザベスだけが生産できる、
まさにエリザベスそのものだと言っても
過言ではない至高の食べ物！
そう！　それがこの・・・
「MADE IN エリザベスのマンカスっ！」
「うまっ！　うまっ！　くさっ！　うまっ！」
ぐちゅっ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ

「うっ！　うぉぁぁぁおおおっ！」
びゅるびゅっびゅるるびゅるっ
どぷどぷぷぅびゅっびゅるっ！
エリザベスの汚マ○コを味わっている間に
汚臭に反応して跳ね回っていたチ○ポが
何度かエリザベスの背中の汚肉とぶつかる。
そんな数回ペチペチとぶつかった程度の刺激で
新たに充填された子種汁がいとも簡単に噴出する。
ドブォォォ
ドビュビュビュ
ビュルッ
ビクン
ビクビク
ビクン

「うっ！　うぉぁぁぁおおおっ！」
びゅるびゅっびゅるるびゅるっ
どぷどぷぷぅびゅっびゅるっ！
エリザベスの汚マ○コを味わっている間に
汚臭に反応して跳ね回っていたチ○ポが
何度かエリザベスの背中の汚肉とぶつかる。
そんな数回ペチペチとぶつかった程度の刺激で
新たに充填された子種汁がいとも簡単に噴出する。
ドブァァ
ドビュビュュ
ビュルッ
ビカーン
ビカ
ビカ
ビカーン

少しの刺激ですぐに達してしまい、
何度出してもすぐに回復してしまう。
刺激し続ければどんな快感が得られるのか…
男では通常経験できないような連続オーガズム
それどころかほぼほぼオーガズム状態を
維持できるんじゃないかという勢いだ
試したい…感じてみたい…
この汚肉で快感を貪りたい！
膜までカスまみれの処女汚マ〇コで
狂う程の射精地獄を味わってみたい！
ぷるぷる
ぎゅ
ぎゅ
ぎゅ

少しの刺激ですぐに達してしまい、
何度出してもすぐに回復してしまう。
刺激し続ければどんな快感が得られるのか…
男では通常経験できないような連続オーガズム
それどころかほぼほぼオーガズム状態を
維持できるんじゃないかという勢いだ
試したい…感じてみたい…
この汚肉で快感を貪りたい！
膜までカスまみれの処女汚マ〇コで
狂う程の射精地獄を味わってみたい！
ぷるぷる
ぐぐぐ
ぐぐぐ
ぐぐぐ

ビクッ
ビクッ
スキン
スキッ
グ
グ
グ
ブ
ブ
ズ
ズ
ズ
ズ

ビクッ
ビクッ
スキン
スキッ
グ
グ
グ
ブ
ブ
ズ
ズ
ズ
ズ

「悪いが一気にいかせてもらったよ…」
わずかにあいた処女膜の隙間に汚チ○ポを強引に捻じ込む
「プツっ…」とほんの微かな音と共に簡単に裂けたように見える処女膜
がしかし汚チ○ポから伝わってくる感覚は、小さく狭かった膜穴が
限界まで広がり、引っ張られ、頑なに進入を拒むも、ついに限界を超え
ブチブチっと大きな音を立てて一気に裂ける肉の感触だった
間違いなく、この女の人生で最も強く男根を締め付けるコトが出来た瞬間だっただろう
ビクッ
ピク
んん
ブチッ
ブチッ
ブチッ
ブチッ

「悪いが一気にいかせてもらったよ…」
わずかにあいた処女膜の隙間に汚チ○ポを強引に捻じ込む
「プツッ…」とほんの微かな音と共に簡単に裂けたように見える処女膜
がしかし汚チ○ポから伝わってくる感覚は、小さく狭かった膜穴が
限界まで広がり、引っ張られ、頑なに進入を拒むも、ついに限界を超え
ブチブチっと大きな音を立てて一気に裂ける肉の感触だった
間違いなく、この女の人生で最も強く男根を締め付けるコトが出来た瞬間だっただろう
ビクッ
ピク
んん
ブチッ
ブチッ
ブチッ
ブチッ

大してピストンをする間も無く、すぐに射精感が高まってくる
「くうっ！　やはり長くは持たないかっ…」
「ああ　たまらん！　悪いがこのまま中に出すぞっ！
気を失っている少女の処女汚マ〇コに中出しいいいっ！」
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ブルン
ブルン
ズブ
ズブ
ズブ
ピッ
ピッ

ビクビク
ビクビク
ビクビク

ビクビク
ビクビク
ビクビク

「はぁ はぁっ はぁ…　んっ？　なんだ?!　何だコレはっ?!　くはっ…しっ…締まるっ！」
何の前触れもなく、我が息子が千切れんばかりに激しく締め付けられる
「これは…再生…だと？　バカな…処女膜が再生しようとしているのかっ?!」
よく見ると先ほどブチ破ったばかりの処女膜が再生を始めている
おそらく意識が無いせいで己に起こった事態を自覚できていないからだろう…
出血を伴う破瓜が外傷だと認識されたようだ
「しかし…コレはっ…」
再生しようとする処女膜が、いまだ挿入したままの肉茎を締め付ける
ピクッ
ピクン
ピクン
ピクッ
ピクン
ポウーン
ギチッ
ぎゅっ
ぎゅっ
ギチッ

「はぁ はぁっ はぁ…　んっ？　なんだ?!　何だコレはっ?!　くはっ…しっ…締まるっ！」
何の前触れもなく、我が息子が千切れんばかりに激しく締め付けられる
「これは…再生…だと？　バカな…処女膜が再生しようとしているのかっ?!」
よく見ると先ほどブチ破ったばかりの処女膜が再生を始めている
おそらく意識が無いせいで己に起こった事態を自覚できていないからだろう…
出血を伴う破瓜が外傷だと認識されたようだ
「しかし…コレはっ…」
再生しようとする処女膜が、いまだ挿入したままの肉茎を締め付ける
ピクッ
ピクン
ピクン
ピクッ
ピクン
ピクッ
ポウーン
ギチッ
ぎゅっ
ぎゅっ
ギチッ
きゅうう

処女膜の再生による激しい締め付けの刺激と共に
こちらの射精管にも次弾の装填が始まる
予期せぬ事態に驚きながらも、湧き上がる快感への渇望を止める事は出来ず
既に貫通したまま、少女に二度目の貫通式を経験してもらおうと動き出す…しかし
「くそっ…なんて締め付けだっ！　破っても破っても再生が止まらない！
この娘の処女膜に締め千切られそうだ！　他の女じゃ絶対味わえない快感！
これはスペシャルなオリジナルメニューが出来きたようだな…」
「美少女処女膜無限破瓜プレイ!!」
はうっ
ビクン
ビクン
ブチッ
ブチッ
ブチッ

処女膜の再生による激しい締め付けの刺激と共に
こちらの射精管にも次弾の装填が始まる
予期せぬ事態に驚きながらも、湧き上がる快感への渇望を止める事は出来ず
既に貫通したまま、少女に二度目の貫通式を経験してもらおうと動き出す…しかし
「くそっ…なんて締め付けだっ！　破っても破っても再生が止まらない！
この娘の処女膜に締め千切られそうだ！　他の女じゃ絶対味わえない快感！
これはスペシャルなオリジナルメニューが出来きたようだな…」
「美少女処女膜無限破瓜プレイ!!」
ぶちっ
ぶちっ
ぶちっ

「しまる！ しまる！ しまる！ しまる！ しまるうううっ!!
処女膜汚ま○こしまるうううーっ!!」
「くあっ！ これは…ヤバイのが来そうだっ！ ああああっ！
でる！ でる！ でる！ でる！ でる！ でる！ でる！ でるっ!!
おおおおおおおおおっ！ 俺のガキでも産みやがれっ!!」
はぁ
はぁ
はっ
はっ
あぁ
あぁ
ビクン
ビクン
ビクン
ズブッ
ブッ
ブッ

「しまる！ しまる！ しまる！ しまる！ しまるうううっ!!
処女膜汚ま○こしまるうううーっ!!」
「くあっ！ これは…ヤバイのが来そうだっ！ ああああっ！
でる！ でる！ でる！ でる！ でる！ でる！ でる！ でるっ!!
おおおおおおおおおっ！ 俺のガキでも産みやがれっ!!」
はっ
はぁ
はっ
はっ
あっ
あぁ
ビクン
ビクン
ズブッ
ブッ
ブッ

ビクッ
ビクッ
ビクビクッ
ぅぅぅん
ぅぅぅん
プルプル
プルプル
プルプル
プルプル
ぶしゅ
ぶしゅ
ぶしゅ
ぶしゅ
ぶしゅ
ぶしゅ
ぶしゅ
ぶしゅ

ビクッ
ビクッ
ビクビクッ
プルプル
プルプル
プルプル
プルプル
ブシュッ
ブシュッ
ブシュッ
ブシュッ
ブシュッ
ブシュッ

ピクン
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
ピクン
ピクン
ピクン
ピクン
ピクン
ピクン
ピクン
ビクン
ビクン
ビ

「ハァ…ハァハァ…っ…まさかこれほどとは…」
「さすがにこれ以上はまともな精神を保っていられる自信がない…」
まだまだ衰えをしらない溢れる劣情を必死に押さえ込み女から離れた
コレだけ身体的にも高スペックで特殊能力まで備えた稀有な雌豚には
そうそう出会えないだろう
こんな機会をみすみす逃す手はない
「従業員採用試験合格だ…エリザベス」
ピクン
ビクン
ゴプゥ
ドボ

料理でもない　酒でもない…
雌豚の奉仕亭の売りは食事をした客だけが受ける事のできる
オプションサービスにある。
雌豚がお客様にご奉仕をする…
まあ店名そのままの淫行サービスだ。

本来ならば当然本人も承諾の上で働いてもらうのだが
今回は別である。
勝手ながら一応助けてやった恩もあるわけで
しばらくは店の売り上げに貢献してもらうことにした。
元々道義を重んじる人種でもなかったので
金の為なら鬼畜の所業とて、ほんの少し心が痛む程度である。

ということで

都合のイイ洗脳魔法的なモノがあったり使えたりするからかけてみた
本人の意識もあってないようなモノだからか
例の能力もそのまま維持するコトが出来た
一通りのコトは一晩かけて仕込んでやったので
業務に支障が出るコトはまずないだろう
男なんてのは大抵、穴っぽこに棒を突っ込めりゃそれで満足するもんだ

都合のイイ洗脳魔法的なモノがあったり使えたりするからかけてみた
本人の意識もあってないようなモノだからか
例の能力もそのまま維持するコトが出来た
一通りのコトは一晩かけて仕込んでやったので
業務に支障が出るコトはまずないだろう
男なんてのは大抵、穴っぽこに棒を突っ込めりゃそれで満足するもんだ

「さあエリザベス　記念すべき初仕事だ
まずはお客様にご挨拶を」
「はい　マスター…　初めまして　エリザベスと申します
まだまだ経験の少ない小娘ですが
皆様に可愛がっていただけますよう
誠心誠意ご奉仕させていただきます」
「私達はこの店の常連なんだよ」
「そうそう、毎回マスターがこの町に立ち寄るのを心待ちにしていてね」
「何やら今回は特別にイイ娘が入ったと聞いたんで
とても楽しみにしていたんだよ

「さあエリザベス　記念すべき初仕事だ
まずはお客様にご挨拶を」
「はい　マスター…　初めまして　エリザベスと申します
まだまだ経験の少ない小娘ですが
皆様に可愛がっていただけますよう
誠心誠意ご奉仕させていただきます」
「うむうむ　私達はこの店の常連でね」
「そうそう、毎回マスターがこの町に立ち寄るのを心待ちにしているんですよ」
「何やら今回は特別にイイ娘が入ったと聞いたんで
とても楽しみにしていたんだよ」

「挨拶もそこそこで申し訳ないが
早速一発抜いてくれないか
どうしたコトか先程から私の股間が
爆発しそうなくらい勃起していて苦しいんだよ」
「おぉ、それは大変だ
さあエリザベス
お客様に最高のおもてなしを」
「はい マスター
それではお客様… ご奉仕を始めさせていただきます」

「挨拶もそこそこで申し訳ないが
早速一発抜いてくれないか
どうしたコトか先程から私の股間が
爆発しそうなくらい勃起していて苦しいんだよ」
「おぉ、それは大変だ
さあエリザベス
お客様に最高のおもてなしを」
「はい マスター
それではお客様… ご奉仕を始めさせていただきます」

「それでは、まずはお口で失礼します」
ちゅっ ちゅっ ちゅぱっ
「おっ…おおおう！ うううっ！
こっ…これは…」
ちゅぱっ
ちゅっ
ちゅっ
ぢゅるっ
ビクン
ビクッ

「うあうっ！　まさか口に飲み込まれただけで湧き上がる射精感！
そ…想像以上だ…まさかこんなに早くとは…んがっ！」
「あぁっ！　もう出るっ！
出すぞ！　全部飲んでくれっ！」
「んっ…ぐっ…は…はひっ…」
んっ
すぐぐぐぐっ
ぶぐっ
ピクン
チュブッ
チュル
ジュッ

「んんっ！　んんんんんんんっ！
んぐっ…こくっ…ごくっ…
ごきゅっ…ごくりっ…んぐっ」
「そうだいいぞ　そのまま全部飲み乾せ
最後の一滴まで吸い上げるんだっ」
ごきゅっ
ごくっ
んぐっ
ドピュッ
ビュルルッ
ビュッ

「うぐぉっ！　バカな…返す刀の吸い上げでまた射精感だと?!
たった一度のストロークで2発も搾り取られるというのかっ?!」
「あぁっ！　でっでる！　でる！　でるぅっ！」
ん、ん、
すごぉぉぉ。
チュクッ
ビクッ
ビクーン

「かはっ！　吸い出されるっ！
出したばかりの精子袋からまたしても吸い出されているっ！」
「ああ…まだ射精中なのに精子袋に精子がパンパンに充填されていくっ…
これ程の快楽…恐ろしいな…命の危機すら感じる…」
うぐぐ
んんっ
ちゅうぅ
ごきゅ
ちゅうぅぅぅ
ビュルルルルッ
ビュッ
ビクンビクン
きゅーん

「次は私のモノもお願いします」
「はい、かしこまりました。　お……大きい……」
んれろっ…れろっ…
「私は口淫が大好きなんですよ。特にイラマチオ。
しかし見てのとおり性器の大きさに少し難がありましてね…
普通の女性では奥に入れ込むどころか
咥えることすらもままならない。
無理矢理捻じ込んでもすぐに顎を破壊しちゃいますしね
しかし、あなたなら多少の無茶も利くと聞きました」
「えっ？」
はぁ
はぁ
れろ
はぁ
れろ
はぁ

「なので今日はぞんぶんに楽しませていただきますよ」
「えっ？　ちょっ…何をっ！　んんんっ！　んぐっ…ぷあっ！」
むっムリ！　ムリです！　こんな大きいの咥えられないっ！」
んんぅ
むにっぐにっ
うぐっ
ムニムニ
ガニガニ
あ、そうそう。　多少歯を立ててしまう程度なら良いですが
間違っても噛み千切らないでくださいよ？
なんならその歯も全部叩き折ってからにしましょうか？
それくらいなら大丈夫なんでしょう？」
「なっ何を言って…うぐっ…んんんうううっ！」

「あああっ！　入ったあああ!!」
ズボオオッ
んぐんぐんぐんぐ
ギャーン

「はぁぁぁ！　イイですねぇ！　最高ですよ！
気持ち良すぎてこのまま突き殺してしまいそうです」
「あぁ、本当にすぐ出てしまうのですね…
こんな機会はめったにないので
もっとじっくり楽しみたかったのですが…残念」

ドピュッ
ドピュッ
ぷあっ
ぐぐぐ

「ほう、スゴイ量だ…普段の5発分は出てますねぇ
すぐ果てはしましたが射精時の快感は強く長かったので
よしとしましょうか
ふふっ、汚腹いっぱいになりましたか？」
ブブッ
えぐっ
えぐっ
ん
ごくっ
ごくっ
ブブッ
ブブッ
プピッ
ブッ
ブッ
ブッ

「もう我慢の限界だ　早くこっちへ来い！　次は俺の番だ！
そのデカパイで楽しませてくれよ」
「は…はい…ただいま…
お待たせして申し訳ございませんでした…」
「あれだけ酷い目に遭わせたというのに…
随分と従順ですね？」
「はい、そういう調整をしてありますので
死ぬほどの苦痛でも、この娘には癖になる快楽です」
「なるほど　ならば何の遠慮もいらねぇな」
ムチィ
みちぃ

「あぁ…私の汚っぱいにこんな使い方があったなんて…
大きくて重くて邪魔なだけだと思ってたのに…
こんなに卑猥な形に合わせて汚肉が歪んで汚チ○ポを包み込んで…」
はぁ
チロチロ
はっ はっ
ムチ ムチ
んっ
レロレロ
はっ
んんっ
ぐぐっ
「おおぅ！ こんな肉圧のパイズリは初めてだ！
しかも、もう出ちまいそうだっ！ あぁっ！ 出すぞ！」

「ああっ…私の汚肉で…私の汚肉で…」
あがれそうっ
あはっ♡
ビュルルルルッ
ビュルルルルッ
ドビュッ
ビュルルルルッ
ビュルルルルッ
はっ
んっ
あっはっ
んぐぐぐ
「おおっ！ そのまま先を舐め続けてくれっ！ そのまま そのままっ！
ああぁっ！ このまま連続でイケそうだっ！ また出すぞっ！ 出すぞっ！」

「あぁっ！　でてますっ！　いっぱいでてます！
こんな何の役にも立たないと思っていた汚肉の塊が
まさかこんなにも汚役に立つ汚肉だったなんて…
とても嬉しいですっ！」
「おおうっ！　2回目なのにでるわでるわっ！
こりゃスゲェなっｗｗｗ
魂まで引っ張り出されそうな勢いだな」
あっ
はっ
はっ
はぁっ
あんっ
ぎゅっ
ぎゅっ
ぎゅうう

「おああ、最高の肉袋だ
出しても出しても全然治まらねぇ！
しかし足りねぇ！　もっとだ！
もっとその汚肉でシゴかせてくれっ！」
「どうぞシゴいてください
この卑しい汚肉がパンパンに詰まった
私の汚ったない袋でシゴき倒してください！
もっともっといっぱい気持ちよく
なってください！」
はっ はぁ はっ
ギュッ ギュッ

「おあぁ、最高の肉袋だ
出しても出しても全然治まらねぇ！
まだまだ足りねぇ！　もっとだ！
もっとその汚肉でシゴかせてくれっ！」
「どうぞシゴいてください
この卑しい汚肉がパンパンに詰まった
私の汚っぱい袋でシゴき倒してください！
もっともっといっぱい気持ちよく
なってください！」
はっ はぁ はっ
ギュッ ギュッ

「私もそろそろ再戦といこうか
交せてもらうよ
君の身体から放たれる芳香…
この凄まじい雌汚臭を嗅いでいると
どうにも我慢が利かんようだ」
「はあっ うれしいです
私なんかの臭いニオイで
汚ち○ぽをビンビンに
してくださるなんて」
「よろしければ私の汚マ○コを
汚くて臭い私の汚マ○コ汚肉を
存分にお使いください」
「では、そうさせていただこう」
ピクッ ピクッ
ああん
んふぅ♡
ギュッ ギュッ

「私もそろそろ再戦といこうか
交せてもらうよ
君の身体から放たれる芳香…
この凄まじい雌汚臭を嗅いでいると
どうにも我慢が利かんようだ」
「はあっ うれしいです
私なんかの臭いニオイで
汚ち○ぽをビンビンに
してくださるなんて」
「よろしければ私の汚マ○コを
汚くて臭い私の汚マ○コ汚肉を
存分にお使いください」
「では、そうさせていただこう」
ピクッ ピクッ
あぁんっ
んっぷぅ
ギュッ ギュッ

「んっ?! いっ…痛っ!!
えっ?! ちょっ…そんなっ?!
処女…膜?
どうして?! ありえないっ!!
処女膜なんてありえないっ!」
ビクン
ビクン
ズブッ
ズブッ
ズブッ
ズブッ
ブチッ
ブチッ
ブチッ
ブチッ
ビクン
ビクン
ビクン

「んっ?! いっ…痛っ!!
えっ?! ちょっ…そんなっ?!
処女…膜?
どうして?! ありえないっ!!
処女膜なんてありえないっ!」
ズブッ
ズブズブッ
ブチッ
ブチッ
ブチッ
ブチッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ん、あっ、あっ、
ん、あっ、はぁ、

〈初めはちょっとした好奇心で
汚股を弄ってみたら、あまりに
気持ち良過ぎてクセになっちゃって
自分の中指で開通式を済ませてからは
毎晩のように穴の奥の奥までほじくりまわして
ガバガバのクパクパだった私の汚マ〇コに処女膜なんて！
あるわけないのに…
あるわけないのに破られちゃってるぅ！〉
ぁん
ぁぁん
ぁっぁ
ぁっぁ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐぢゅ
ぐぢゅ
ぐぢゅ
ぐぢゅ

〈初めはちょっとした好奇心で
汚股を弄ってみたら、あまりに
気持ち良過ぎてクセになっちゃって
自分の中指で開通式を済ませてからは
毎晩のように穴の奥の奥までほじくりまわして
ガバガバのクパクパだった私の汚マ〇コに処女膜なんて！
あるわけないのに…
あるわけないのに破られちゃってるぅ！〉
ぐちっ
ぐちっ
ぐぢ…
ぐぢ…
ぐぢ…

「えっ?! ちょっと?! まさかっ!
処女膜が再生してるの?!
そんなっ どうして?!
あぁっ! ウソっ?! また破られてるっ?!
いやっ! 痛い痛い痛いっ!
処女膜の再生が止まらないっ!」
痛い…膜を裂かれる度に汚股から頭まで
身体を半分に引き裂かれたような激痛がっ…
…でも…でもこれって…
はっ
はっ
はっ
ぶるぶる
ずぶぶぶっ
ズキッ♡ ズキッ♡ ズキッ♡ ズキッ♡

「えっ?! ちょっと?! まさかっ!
処女膜が再生してるの?!
そんなっ どうして?!
あぁっ! ウソっ?! また破られてるっ?!
いやっ! 痛い痛い痛いっ!
処女膜の再生が止まらないっ!」
痛い…膜を裂かれる度に汚股から頭まで
身体を半分に引き裂かれたような激痛がっ…
…でも…でもこれって…
ぎぃぃっ
はっ
はっ
はっ
ビッ!!
ブチッ
ブチッ

「ぎんもぢいいいいいっ!!」
(こんなに痛いのにこんなにも気持ちイイなんてっ!
ああっ いやぁ!
こんなの本当に壊れちゃうっ!
あたまバカになっちゃう!)
ぐりぐり
ぎゅぎゅ
ぎゅぎゅ
ぎゅん
ぎゅん
ぎゅん

「ぎんもぢいいいいいっ!!」
(こんなに痛いのに
こんなにも気持ちイイなんてっ!
ああっ いやぁー
こんなの本当に壊れちゃうっ!
あたまバカになっちゃう!)
クリクリ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ

「ダメぇー もう再生しないでっ！
もうこれ以上再生しないで私の処女膜っ！
処女膜破かれてイっちゃうの！
何度も何度も裂かれてイっちゃうの！
いやっ！ もういやぁ！
もう処女喪失いやぁぁぁっ!!」
はぁん
あぁ
はぁ
ビクッ ビクッ
ガッ ガッ
ズッ
ぎゅん
ぎゅん
ズッ ズッ
ズッ
パン パン

おぉぉぉぉ
ビクン
ビクビクビクビクッ
ビクン
ビクビクビクッ
ビクン
ビクビクビクッ
ビクッ
ビクッ

「もっとお！ もっと出してくださいっ！ もっと私で気持ち良くなって！
もっと私の汚肉の摩擦でどぴゅどぴゅ射精してくださいっ！」
「あぁっイクぞっ！ 望み通り出してやる！ しっかり受け止めろよ！」
「あぐうっ！ 申し訳ありません！ 私もイキそうです！ 雌豚の分際で
皆さんの汚チ○ポ勝手に使って汚マ○コアクメしそうです！ もうダメっ！
イキますっ！ ごめんなさいっ！ イってごめんなさいっ！ ごめんなさいっ！」
はっ
はっ
ん、
ん、
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ

「もっとお！ もっと出してくださいっ！ もっと私で気持ち良くなって！
もっと私の汚肉の摩擦でどぴゅどぴゅ射精してくださいっ！」
「あぁっイクぞっ！ 望み通り出してやる！ しっかり受け止めろよ！」
「あぐうっ！ 申し訳ありません！ 私もイキそうです！ 雌豚の分際で
皆さんの汚チ○ポ勝手に使って汚マ○コアクメしそうです！ もうダメっ！
イキますっ！ ごめんなさいっ！ イってごめんなさいっ！ ごめんなさいっ！」
はっ
はっ
ん、
ん、
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ

「あああああ!! いぐうう! いぐっ! いぐいぐいっぐうううーっ!!」
はぁ
はぁ
はぁ
ビュルルル
ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビクン
ビクン
ビクン
ビクン
ビクン
ビクン
ドクドクドクン
ビュッ

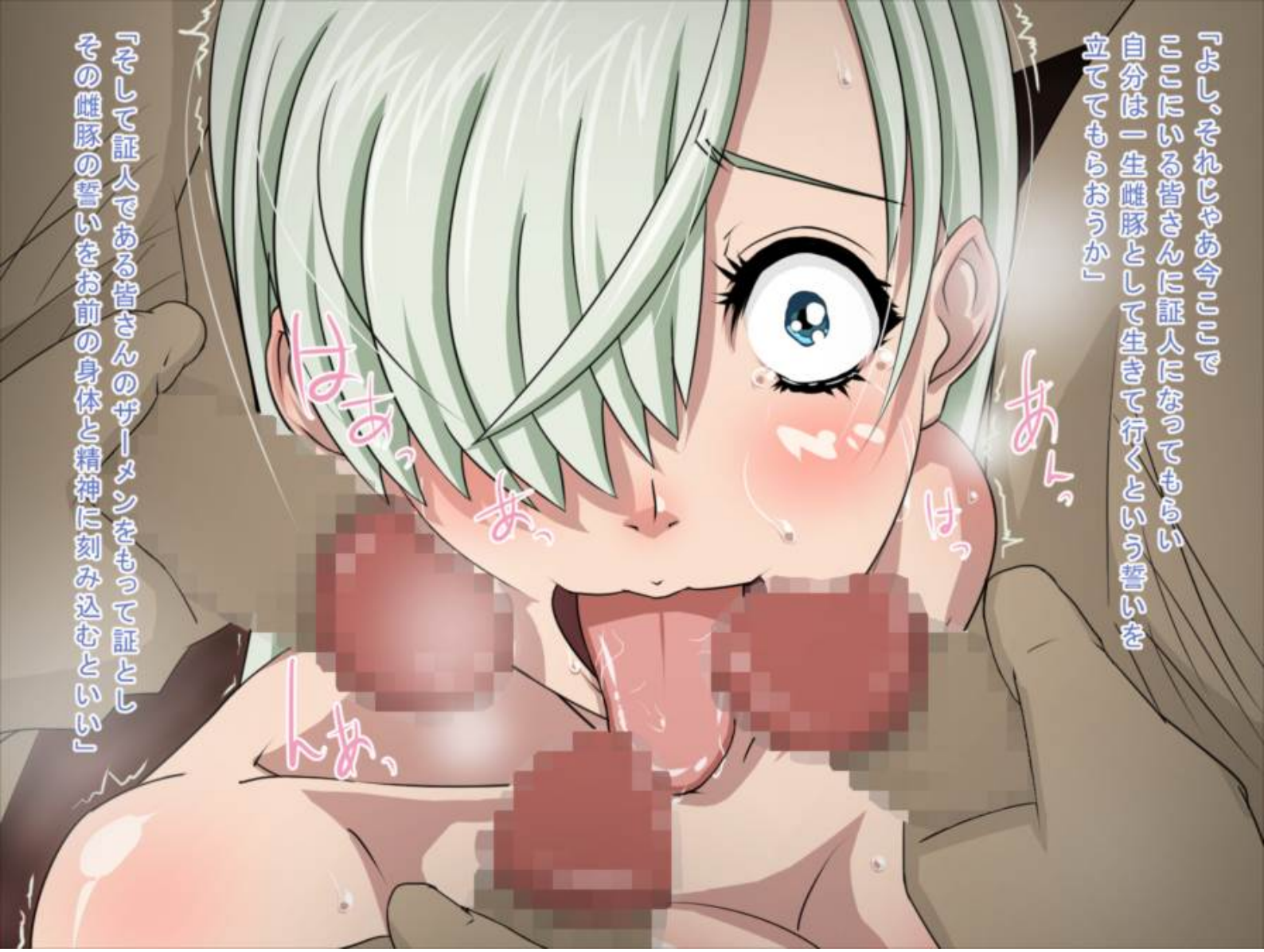
「あああああ!! いぐうう! いぐっ! いぐいぐいっぐうううーっ!!」
はぁ
はぁ
はぁ
ビュルルル
ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビクン
ビクン
ビクン
ビクン
ビクン
ビクン
ビクン
ドクドクドクン
ビュッ

「ありがとうマスター…なんとも貴重な経験をさせてもらったよ」
「そうですね…しかし一度この快感を経験してしまうと
この先もう普通の行為では満足できないのではと心配してしまいますよ」
「確かに…二度とこの快感を味わうコトが出来ないと思うと
生きる気力すらも無くしてしまいそうな勢いだ…」
やはりこのまま手放すのは大変おしい逸材…ということか
「この娘は、死ぬまでこの店の雌豚従業員として私が飼う事にします
ババアになってもマニアな需要はそれなりに多いですからね
物言わぬ肉塊になるまで、専属の雌豚としてみっちり働いてもらうとしましょう」
「おぉ、それはイイ！　また相手をしてもらえる日が楽しみだ」
はぁはぁ
あはぁっ
はぁ
ビクビク
きゅーん
ビクビク

「ありがとうマスター…なんとも貴重な経験をさせてもらったよ」
「そうですね…しかし一度この快感を経験してしまうと
この先もう普通の行為では満足できないのではと心配してしまいますよ」
「確かに…二度とこの快感を味わうコトが出来ないと思うと
生きる気力すらも無くしてしまいそうな勢いだ…」
やはりこのまま手放すのは大変おしい逸材…ということか
「この娘は、死ぬまでこの店の雌豚従業員として私が飼う事にします
ババアになってもマニアな需要はそれなりに多いですからね
物言わぬ肉塊になるまで、専属の雌豚としてみっちり働いてもらうとしましょう」
「おぉ、それはイイ！　また相手をしてもらえる日が楽しみだ」
はぁはぁ
あはぁっ
はぁっ
ビクビク
ビクビク
きゅーん
ビクビク

まあ、本来の自我を無理矢理抑え込まれて
強性労働させられるのだから、本人からしてみれば
大変不本意で酷い話なのだろう…がしかし
「おそらく上流階級の出身であろうお前のような若い娘が
あんな鎧で身を隠してまで彷徨い歩き、挙句に行き倒れる…
何か余程の事情か面倒に巻き込まれているんだろう？
自らの命だけでは済まない程のな…」
はっ
はっ
はっ
はっ
はっ
はぁっ
はっ
はっ
はっ
はっ
はぁっ

「しかしもう大丈夫だ　ここにいればそんなすべての
煩わしいモノから開放されて楽になれる」
「問題を解決しようと頭を悩ませる必要もない
力を貸してくれる人間を探す必要もない
そんなヤツらと共に危険な旅を続ける必要もないんだ」
「どうだ？　大変喜ばしい事だとは思わないか？」
「そうかそうか　震えて泣くほど嬉しいか
そこまで喜んでくれるとはな　俺も嬉しいよ」
あぁっ
あぁっ
あぁっ
あぁっ
あぁっ
あぁっ
あぁっ
あぁっ


「よし、それじゃあ今ここで
ここにいる皆さんに証人になってもらい
自分は一生雌豚として生きて行くという誓いを
立ててもらおうか」
あんっ
はっ
はあっ
あっ
んあっ
「そして証人である皆さんのザーメンをもって証とし
その雌豚の誓いをお前の身体と精神に刻み込むといい」

「さあ、エリザベス！　誓え！
今日から自分はただの雌豚だと！
自分の醜く卑しい汚肉を使ってより多くの尊い
ザーメンを搾り取るザーメン搾乳機になると！
事切れるその瞬間まで自分は世界のザーメン吐き袋だと！」
あぁぁぁっ♡
はぁっ
はぁっ
あっ
あっ
んぁ
んぁ
あぁぁぁ
シュッ
シュッ
シュッ
シュッ
シュッ
シュッ
「はいっ！　誓いますっ！　私は雌豚になります！
私のありとあらゆる汚肉を使って最高の『どぴゅどぴゅっ！』を
していただくためだけに生きて行くと誓います！
私はただただザーメンを搾り倒すだけの全身汚肉摩擦マシーンです！
どうぞ存分に吐きかけてください！　ザーメン好きぃ！　臭いの好きぃ！
私にザーメンをっ！　この国にザーメンをっ！　かけてぇ！　かけてぇ！」

ザメン
キたこあ♡
あはっ
あはっ
あはっ
あはっ
はぁはぁはぁはぁ
あぁあぁあぁ
ビルッビュル
んがっ
はっ
んぶっ
ドブッ
ドピュ
ドブブブブ
「これから末永くよろしくな
エリザベスちゃん」

それにしてもイイ拾い物をしたもんだな

今度は巨人族の美少女でも倒れてねぇかな
あれだけの巨体だ…腋や下乳、足や尻に挿まれて
汚臭にまみれるのも容易だろう
何より溜まったマンカスもさぞかしデカくて
食いごたえがありそうだしな…
よし、旅の途中で少し探してみるか
はぐれ巨人美少女がひとり森の木陰で居眠り…
なんて現場に遭遇する可能性も無いとは言い切れねぇ

完